

〈鼎談〉

幸福と社会学

鼎談者	大村英昭*
	塩原勉**
	厚東洋輔***
司会	山中浩司****

■山中 大村先生、まず関西学院大学でのCOEプログラムに強い思いをもたれているということについてお話しいただけますか？

■大村 私が着任して3年目くらいに、当時は「21世紀COEプログラム」ということで、社会学では東北大学と関西学院大学とが採択され、本学の総タイトルは「人類の幸福に資する社会調査の世界的拠点形成」というものでした。キーワードが2つでございまして、1つは「幸福」ですね。人類の幸福ということ。もう1つは、「社会調査」です。社会調査の新しいやり方を考えたいと。その2つを含んで、サブタイトルというかサブテーマとして「脱欧入亜」ということも含まれておりました。

「幸福」というのは、今までまともに社会学が取り上げてこなかったものです。調べたら「生活満足度」の調査はあるんですが、そこでは「幸福」は、「well-being」「welfare」とか、福利という感じでとらえられますね。私は、「well-being」でいくと、どうしても生活臭がくると思っています。「well-being」とか「生活満足度」の測定基準というのは、もちろん心理学的にはあります。国際機関もございまして、日本でも各都道府県で調査していて、意外に、GDPというか生産レベルの低い北陸各県などが非常に生活満足度が高いと

いうことで、よく注目されておりますね。そういう意味で生活満足度というのも大事な指標だとは思いますが、私は、あえて「人類の幸福」といったときに、それは違うなと思ったんです。そういう生活臭とは違うもの考えたんです。

「happy」という言葉は「well-being」とは違います。語源的にも違うし、辞書で調べても分かりますけれども、「しあわせ」というのは、今は「幸福」の「幸」という字に「せ」と送りますけれども、昔は「仕事」の「仕」に「合わせる」と書いて、「仕合わせ」と送るわけです。この「仕合わせ」が意味するのは、「巡り合わせ」です。欧米語の「happy」も、もとは「happening」と語根は一緒ですから、やはり偶然的な巡り合わせなんですね。これは世界的にいえます。フランス語の「bonheur」というのもそうですね。巡り合わせの良さとか……。

これを「well-being」と言ってしまうと、生活臭とか、非常に必然性みたいなレベルで考えられるわけです。そうではなくて、「幸せ」というのは、偶然の、天の配剤であると。それを何とか理論化しようと、400字詰め原稿用紙を160枚くらい用意しまして、「幸福と不幸の臨床社会学」（『先端社会研究』創刊号、2004年）というものを書いたんです。

幸福の偶然性という話からいくとだんだん広

*関西学院大学社会学部教授

**元関西学院大学社会学部教員、大阪大学名誉教授

***関西学院大学社会学部教授

****大阪大学大学院人間科学研究科教授

がっていきまして、「予言の自己実現」というのがものすごく大事になってきて、最後は、「システム外無根拠性」ということに行き着きます。我々は偶然に生まれてきたんだと。我々の生存そのものに何の根拠もないと。理由を探せとって、そんなものは無理ですと。偶然の産物ですからね。あらゆるものが偶然なんです。だから、社会というのは社会秩序も含めて何の根拠もないのではないかと。根拠があると思えばあるだけの話だと。

例えば初詣のブランド化と言われる。初詣の記録が出るでしょう。見てください。ベストテンは何十年も変わっていません。関西では伏見稲荷と住吉大社ですね。あれはどうしてだと思えますか。考えたらすぐ分かる。初詣行って、もし誰もいなかったら、そりゃあがっかりするよ。誰も行かないよ。みんな行くから安心感あるんです。それこそ、まさしくお客様が神様なんですよ。たぶん御利益があると思ってみんな来ておられるわけです。だけど、御利益があると思って行くという以外に、この御利益の根拠は何もないわけです。

もう一つは、「脱欧入亜」ですね。これは真鍋一史先生と共同で科研をとりました。彼は、国際比較研究をやるときに、質問項目の等価性とおっしゃって、equivalence というんですけれども。「あなた信仰がありますか？」と尋ねても、この質問は日本では通用しないですよ。日本ではほとんど「ない」と言うんです。「信仰があるか」と問われたら、私たちは自信持って「信仰あります」なんて言わないでしょう。ところが、合衆国に行ったらみんな「信仰ある」と答えるんです。要するに中身が違うんですよ。同じ、信仰があるとか、ないとかいっても、全然思うことが違うじゃないですか。正確に測れていないんですよ。それを等価性問題というんですね。

日本国では「信仰がない」と答える人が60%を超え、70%に近づくんです。欧米モデルでいけば、それは無宗教ということになってしまう。ところが、同じ人が初詣には行っているんですね。「信仰がない」と答える人の数と、初詣に行く人の合計とが一致するんですよ。ということはどういうことですか。初詣は宗教行動ではないのか。本人もあまりそう思っていないんですよ。そ

うすると、ここまでくると、「宗教」という言葉がもうベケです。religion ですね。それを「宗教」と訳して「宗教をどう思うか」という、こんな質問日本では通じないですよ。駄目ですね。

そういうしだいで宗教意識の国際比較調査に関しては一つ一つ言葉選びも大変でございましたけれども。それから質的調査に行って、私が目を付けて一番面白かったのは、ペット葬と火葬の広がりです。従来、私たちは、プロテスタントの人々は墓参りしないと聞いていたんです。ペットが死んだときミサをあげてペット霊園に納めるなんて、調査する前は信じられません。ところが、行ってみたらあるんです。ペット葬と火葬、いっぱい見つけたんですよ。これが1つ。

それと、火葬法の遺骨灰を納められた所のほうがお花がきれいなんですよ。よく墓参りしているんですね。これは何ですかと。プロテスタンティズムといっても関係ない。日本と似ているんですね。従来だったら、仏教とキリスト教ってバンと分けていましたけれども、ペットが死んだときどうされるかということ、似ているんです。日本国と変わらないんです。キリスト教でもまったく変わらないんですよ。

従来、簡単にキリスト教と仏教はえらく違うように言われておりましたけれども、それは私の議論からすると、つまり氷山の上、visible な部分だけで見ていたら違うように見えるというだけのことです。だけど、氷山の下、invisible な部分ですね、ここを私は folk religion と言っているんですが、ここまで下がると同じなんですよ。よく似ているでしょと。

同じ宗教心といっても、visible か invisible かで違ってきます。従来言われてきた宗教心は、私の言葉でいうと「特定宗教」、specific religion が培っているところの visible な宗教心で、それを religiosity と言っているわけです。それに対して、私は「拡散宗教」、diffused religion と言っているんですけれども、specified ではない、下のほうを含んで、見えない部分を含めたより大きな宗教、folk religion を培うものを、religiosity と区別して、spirituality と表現したらどうでしょうか。特定宗派性というか、特定宗派根性みたいなところでいえる宗教心を religiosity として、これ

をむしろ貶下、けなす言葉の「貶下」ですね、値打ちを下げさせて、spiritualityのほうをむしろ普遍性の高いものとして、人類共通のものとして描き込んでいくとどうなりましょうか。そういうことを考えていたわけです。私はこれこそが「脱欧入亜」を本気でやれたところだと思うんです。

そういう点で社会学も転換期にあるのではないだろうかとは私は考えているのですが。

■山中 塩原先生その点はいかがですか。

■塩原 社会学はもともと、「幸福」や「不幸」というものをどういうふうと考えてきたか。それとの関連で、社会学というものは当初どういふものだったか、ということについての私の受け止め方をお話ししたいと思います。

大村さんは、今、社会学は大きな転換期の中にあるとおっしゃっているんですけども、私は、個人的に、中学の2年のときに戦争が終わりました。だから、それ以前は富山の田舎の中で、子ども時代に生活していたんです。11月ごろになりますと、何軒かの小作の家の人たちが家にやってきて、いろいろ苦勞があったから小作料をまけてくれという話が延々とこの時期あるんです。

■大村 なるほど、刈り取りが終わった後ですね。

■塩原 ええ。小作の家の貧しさというのは、子どもの目から見ても言語道断で、量ではなくて、むしろ敷きの家で、当時は子だくさんでしたから、娘たちはみんな信州の紡績工場に行っ、2、3年するかしないうちにみんな結核になって帰ってきて、1、2年寝付いて、次から次に亡くなっていくという時代でした。村は付き合いのいい面と、お互いに干渉し合う面があるということが、子ども心に見えてきました。そういう時代から第2次世界大戦が終わって、これは大きな転換期だったと思うんです。

それが基本になって社会学を始めようということになったんですが、私が50代後半くらいになると、それまでの経済成長、産業化、近代化というものが行き着くところに行き着いたような感じ

で、またこの先時代が変わりそうだと。そういう点では、2回ほど時代の転換という感覚を持って社会学と向き合ってきたんですね。

たまたま関西学院大学に勤めているときに、『組織計画の哲学と産業主義』という論文を書きました。というより、関学ではそれ1つしか紀要に載せなかったんですけども。その当時、アルヴィン・グールドナーの書いたものに揺さぶられた時だったんですよ。彼が英訳したデュルケムの『社会主義論』、それを読んでびっくりしたのは、その書かれたものの9割くらいはサン=シモン論だったんですね。デュルケム自身は、サン=シモンが社会学の起点になっているということを書いているわけです。学説史の中では、デュルケムという人は、コントの精神的相続人だとか、そんな言い方されますけれども、もちろんそういう面は多々あるにしても、デュルケムの頭の中で、サン=シモンというのは大きなウエイトを占めていたと思うんです。

今、サン=シモンの社会学は何かという話をしても始まらないんですが、要するに一言でいえば、産業化の社会学というか、あるいは産業者が何をすべきかということについて書いたものがサン=シモンの社会学だったと私は思うんです。それはまさに時代の転換期だったわけです。彼がよく使った言葉は、18世紀は革命的で批判的な哲学が主流を占めていたと。代わって、19世紀の哲学というのは発明的で組織的だと。組織的というのは、能動的につくってまとめていくという意味合いなんですね。発明も似たようなことです。結局、産業者が産業社会をつくっていくという話です。要するに、サン=シモンの社会学というのは、テクノクラートの徹底した社会管理学と社会学哲学だった。

そのサン=シモンが、1825年だったと思います。『新キリスト教』という本を書くわけです。それが彼の最後の著作で、その年に亡くなったんですね。彼が最後に、宗教まで含めて産業社会の、彼としてあるべき、望ましいというものを提案したと。

結局、社会学は、サン=シモンの出発点の時期から時代の転換期を明確にして、そしてそのことを通して、社会全体の幸福という骨格や、高坂さ

ん流にあって減算すべき不幸があるとしたらそれを取り除くという、そういう基本的な考え方だったと思います。

それが社会学の出発点だということで、ますます私は社会学と本気で付き合わなければいけないという気になったんだろうと思うんです。その後社会学を勉強していくにつれて、社会学をつくり上げた図書館の中身は大変雑多だけれども、その中からいろいろ探し出してくると、過去のものだから無意味なものになったということではなくて、いつ引っ張り出してみても、取り上げ方次第では依然として問題提起の力の強い考え方もたくさんあると。

例えば、私が組織論をやっていた関係からとっさに思い浮かべるのは、デュルケム、ウェーバー、パーソンズの3人に、組織のありようについて、架空の議論をさせると非常に面白い議論をしたらどうという気がするわけです。ご承知のようにデュルケムの場合ですと、分業の異常形態をなんとかしなければいけないというのが、彼にとって生きた時代の課題だったと思います。ウェーバーにとっては、圧倒的な官僚制をどうチェックするかということがあった。パーソンズの場合も、彼は教育革命を非常に重視する人でしたから、教育革命との関連で組織問題をどう考えるべきかという、割と大きな論点だったと思うんですね。

私はそういう点で、社会学というのは、一見直接幸福・不幸という問題を扱ってこなかったけれど、時代の転換ということを見据えて、そこからどういう課題が生じてくるか。それを一生懸命考えて、それについてできれば、その人なりの提言、あるいは見通しといったものを出してきたと。

問題は、今、社会学はどういうふうな形で、たとえインプリシットにしろ、幸福とか不幸とかいう問題を扱うのか。専門的な科学知としての社会学と違った、また別のオルタナティブな知のあり方を踏まえて、そういう問題に取り組む必要があるのかもしれない。大村さんの臨床社会学というふうなものです。単なる社会学ではなく、あえて臨床社会学と言われる、そうする何かがあるんだろうと思います。

■厚東 塩原先生のお話を伺って、私と塩原先生はワン・ジェネレーション違う。社会的にいえば、先生の場合は戦後の高度成長の前期で、私は成長した後の停滞期みたいな時期に属しますが、大村先生からこの鼎談にお招きいただいたときに、私は幸福について考えたことはないなど。幸福について個人的に考えたことがないというより、幸福について考えることは社会学に期待していなかったのかなと思いました。

じゃあ私にとって社会学というのはどういうものだったのだろうかかと反省しますと、私は、関学にお世話になってこれで1年10カ月たつのですが、最初の年に、欧米の社会学史をまとめたものの、その序説みたいなものを紀要に書いたんです。そのときに、ほぼ、関学に来ることによって自分なりの社会学の発展の見取り図ができたと思って、書いたんですけれども、そのイメージというのは、社会学の発祥、ブーム化は、塩原先生と少し時期が遅れて、1848年の革命のときが第1期であり、次が世紀末の1890年、それから1940年のナチズムと続きます。

この時期区分はどういうことかという、社会学の興隆というのは、不幸と関係があると。要するに、社会学者はすごく人類の不幸が好きで、不幸に関心があります。名のある社会学者のライフヒストリーを見るとあまり幸せそうな人はいない。私の知っている限りでは、幸せな生涯をおくったのは、クーリーくらいかな。デュルケムも比較的……。しかし、世俗的に成功したからといって、本人は幸福だったのかなという感じもあります。幸福感が非常に乏しい感じの人が社会学者には多い。ということは、私は、社会学というのは、時代の不幸に対して鋭敏に反応して、それに対して発言することによって、学として大きく発展したと。経済学には *dismal science* (陰気な学問) という呼称があり、マルサスがその代表ですけど、経済学は必ずしも不幸を中心テーマにしてはないと思います。それに対し、社会学は不幸好きであるということなんですね。

話が飛びますけれども、最近必要があってホブハウスのソシオロジーというのを読み返したのですが、概論なんですけれども。ソシオロジーの定義について書いてあって、2行目くらいに、ソシ

オロジーという名前から期待されるのと違って、社会学の対象には、不和とかコンフリクトもあると書いてあるんですね。私は「えっ？」と思ったんです。最初読んだときよく分からなかったんですけども、よく考えると、「ああ、そうか」と。ソーシャルというのは、人と人が気が合うとか、仲良くやるとか、人と一緒にいることが楽しいという感覚があるんだなと。ソシオロジーというのは、そういう部分についてお留守だったかなと。そういうことを話すのがちょっと照れがあるみたいだね。あるいは、浅いという感覚が与えられて禁欲していたのかもしれませんが。関学の宮原浩二郎先生が「社会美学」を提唱されていますが、ある種社会学も成熟期に達したと見なすべきかもしれません。

不幸というのは意外と一般性があるって、むしろ幸福のほうが人さまざまなのかなと。だから、社会学で一般性を求めたときに、不幸の語りを使ったのかもしれませんが。私は、完全に大村先生の批判の対象の「脱亜入欧」ですし、それからまた、不幸・幸福について一回も社会学として考えたことがないというので、きょうの大村先生のお話には、なるほどそうか、私は非常に偏った形の世界を講義していたんだと反省させてもらいました。

そこで、大村先生の臨床社会学というコンセプトをじっくり聞いておきたいんですが。

■大村 ないんです(笑)。あのね、迷ってしまいました。自分では実はよき社会学のことを臨床社会学と言っているんです。だからデュルケムの『自殺論』は臨床社会学だと。しかも彼は『自殺論』は診断であると言っている。時代の診断書として書かれたのが『自殺論』で、実践的な解決策、つまり介入というレベルでの政策論は教育論としてされている。それが『道徳教育論』ですね。だから、そういう意味でデュルケム社会学こそが理想的な臨床社会学だというのが私の解釈でございます。

デュルケムに続いてのものすごくいいなと思ったのはゴフマンだけなんです。ゴフマンは非常にマイクロでパーソナルなレベルで議論しておられるけれど、その背景には明らかにデュルケムがある

ということが私の主張です。だから、デュルケムとゴフマンの社会学全体が臨床社会学なんだと。

■厚東 臨床社会学というときに、大村先生にしかできないなと思ったのは、こういうことだったんです。社会学の知をパーソナル・コミュニケーションの水準、先ほど言ったように非常に直接ソーシャルなレベルの体験をもとに社会的な知を構築する、これが私の考えた臨床社会学だったんですね。

現時点でふり返ってみると、大村先生のお仕事を拝見して、1990年代の後半頃に変われたなと。「非行」の社会学から、広く言って宗教社会学のほうにシフトされたといえますが、そのときに、宗教社会学とおっしゃらないで、あえて臨床社会学という看板を掲げられたのは、たぶんこういうことであつたのではないかと。パーソナル・コミュニケーションを念頭に置きながら、社会的な知を構成するのに加えて、もう一つ、社会的な知、例えばデュルケムの学説をもう一回パーソナルなコミュニケーションのレベルで翻訳してみせると。たぶん、ほかの臨床社会学の人だと後者の局面は、手におえないのが普通でしょう。そういう局面はだいたい社会学には発揮するチャンスは見あたりません、ひざ詰めで社会的な知をかみくみてみせるといった局面は。やはりご住職さんだということが非常に大きい役割を果たしたと思うんです。

私はこの前『上手な逝き方』(集英社新書 2010年)を読んで驚いたんですけども、真宗というのは特異だなと。月命日というのがある。

■大村 はい、そうです。

■厚東 うちの浄土真宗だったんですが、お坊さん、月ごとに来たこともない。ただ、お葬式のとき法話がありますよね。そうすると、月ごとに法話するというのは、ひざ詰めで一般的な知を聴き手に合わせて話すということが、大村先生はかなり自然な形で肉体化されていたのかなと。だから、大村先生の臨床社会学は先生一代のもの、ある種、技だと思うんです。大村先生以外には継承しようがなかったというか、あるいは、社会学は

そうしたチャンスを与えられていないというか。

■大村 臨床社会学で学生たちに一番大事にさせることは、「身につまされるように」と言うんですよ。「身につまされるように書いてね」と。感情抜き、アフェクティブニュートラルリティというか、そういうものこそが理性的だと判断されるけれど、これは大間違いだと。「あなたのいじめられた体験を詳しく書いて下さい」とやると実に面白いものを書いてくれる。でも、そしたら今度はそればかりになってしまっ……。今や、『自殺論』を読みなさいと言ったって無理でしょう。学生読まない。大学院でも読まない。

■厚東 その一つの理由としては、学会の規模が大きくなりすぎ、官僚制化が進んでしまった点が指摘できるかもしれません。私、社会学のこと面白いと思うのは、例えば塩原先生がちょっとお話しされるグールドナーの面白さとか。面白いというのは、別に体系立ててではなく、ちょっともらされた言葉にあります。田中清助先生なんて、談話中咳をされてた時間が長かったのですが、ちょっとマルクスの面白さだとかを言うてくださる。今、思えば、社会学的牧会だったんだと思う(笑)。大村先生のもそうですよね。話し相手が違えば、またしゃべり方も力点も変わってくるんですよ。

■塩原 私は、臨床社会学の出番ではないかという気持ちがあって、大村さんは最初とは違った評価を下しておられるようだけれども、つくりにかたによっては、臨床社会学というのは面白くなっていくかなという気がしているんです。

つまり、近代的な科学知というか、専門的科学知に対してもう一つの知のあり方というのは、最初に言ったのは中村雄二郎さんですよ。言葉自体も「臨床の知」だったと思います。

■大村 はい、そうですね。

■塩原 普遍主義に対して、トボス特有の意味の世界があるとか。それから論理主義でしたか分析主義でしたか、それに対しては、意味が多義的に

あるから、それはシンボリズムだと。いろんな意味が相乗りしている。客観主義に対しては……。

■大村 主観主義とは言わないのですよね。パフォーマンスという。

■塩原 主と客の相互反応みたいなものですよ。最後にもう一つ。これは明らかに専門的な科学知とは違ったものですが、社会学を含めて、社会科学は200年くらいの歴史がありますよね。その歴史というのは結局、分化の歴史でだんだん話が専門分化してくるわけですよ。

医学部で医学原論を教えていた中川先生が、昔は、解剖図の後ろにちゃんと景色まで書いてあったと。つまり、解剖されている人間がみんな、自然とかいろんな風景の中にいると。今は医学書は臓器一つ一つを分離して載せているんだそうです。おまけに山中さんの言われるように、聴診器さえ使えない人が出てくる。それはそれなりに細かいことをたくさん深く覚え込んだり、教え込んだりしているんでしょうけれど、そういう限りのない分化、Differentiation というのがあったと思うんです。

そここのところにディシプリンが成り立ってきている。ディシプリンと思われるのがつくられたと思っていたんですね。だけど、実際、生活世界という面から振り返ってみると、いろんな問題がひしめいている。ですから、ディシプリンのそういうエリアとは別にイシュー領域が年々膨らんできていると思います。

私は、そういうイシュー領域というのは、一つの学問だけでは成り立たないわけで、俯瞰的というか連携的な知、ネットワーク知みたいなものでしか見えてこないところだと思います。そういうイシュー領域に切り込めるのは、科学知ではなくて、臨床的知みたいなものではないかと思えます。だから、これからもう少しそういうエネルギーを費やして、イシュー領域を扱っていく必要があると思うんです。

■厚東 それと関連するのかもしれませんが、私は、大村先生の臨床社会学に対する評価は厳しすぎるという点も、今こそ出番だと言うんだという

点も、塩原先生と同じ意見です。ただ、幸福の一般理論とか、幸福の社会計画とか、幸福の社会制御といわれると、ちょっとそれはかなわないなと思うんです。そういうようなものが社会学にあったとすると、これは私には肌が合わないなと思う。ただ、幸福の臨床社会学といえは、これはあってしかるべきだと思うんです。

ということは、大村先生の中で、臨床社会学ということと、幸福の問題はそれほど離れていないのではないか、160枚の大作を書かせるエネルギーはそこから来るのではないかと思うわけです。臨床社会学ということでしたら、幸福についての社会学的知というのは分かる。幸福というのは、やはり塩原先生がおっしゃったように臨床的知なんじゃないですか。そのレベルだとある種の納得性がいくと思われまます。

■大村 アメリカの臨床社会学は、デス、ロス、イルネスで、不幸の社会学なんですね。そこは確かにそうで、デュルケムだって自殺データというのは不幸の指標だと言っているわけですよ。確かにそういう意味で、高坂さんがそう言ったわけですけれども、不幸の減算という、政策論的には

missed opportunity というのを数え上げていって、それが減らない場合のことを彼一流の理論で説こうとされていたと思うんです。ですから、まァ不幸はなんとかできるよ、だけど幸福はなかなか難しい。私は、どうしても幸福を取り上げようと思ったために、空中分解するような結果になったんじゃないかなと思います。

鼎談編集者あとがき

2010年11月に行われた大村先生、厚東先生、塩原先生の鼎談は、実際には3時間に及ぶ長いもので、今回の原稿はその一部分に若干修正を加えたものです。したがって一部不明な点や内容が飛躍している部分があること、多くの魅力的でときには危険な議論を割愛せざるを得なかったことをお詫び申し上げます。別の機会に、その内容の全貌をまとめたいと考えております。

鼎談には関係の先生方や若い研究者も陪席し、すてきな社会学的牧会の一晩を過ごせました。この場を借りて3人の先生方と関係者の皆様に感謝申し上げます。

鼎談編集者 渡邊太 古川岳志 山中浩司